

シンポジウム③

「漢方と中医学の架け橋——日本漢方の症例や治療法を中医学の目で解釈して、有効性や普遍性を抽出」

注目ポイント

日本中医学会は中医学を日本の医療に導入し活用することを使命としているが、日本で行われている漢方医学との接点を探り、融合の道を模索することも大切と考える。本シンポジウムは、今学術総会の総合テーマの副題「東アジア伝統医学の発展の可能性」を受けて、日本の漢方医学の症例や治療法、方剤運用法を中医学の目で解釈して、有効性や普遍性を抽出することを目的とする。

座長は常日頃日本漢方を世界の視野から考察されている安井廣迪氏。各演題は、まず漢方医学の黄金時代の江戸期の漢方の医案から学ぶことを平馬が抽出する。矢数芳英氏には、昭和の漢方の大家矢数道明師の臨床を中医学の視点で解析いただく。加島雅之氏には昭和から現代に至る漢方を評価し、その普遍的価値を剔出していただく。中医学と漢方の比較に長年取り組んでこられた戴昭宇氏には中医師から見た日本漢方を評価していただく。

日本漢方の遺産と現代の姿を中医学の視野から分析してその発展性を探り、中国医学をルーツとする東アジア伝統医学の共有財産となる可能性を議論したい。

(平馬直樹記)

中医師からみた日本漢方

戴 昭宇

東京有明医療大学保健医療学部鍼灸学科

「同源異流」「同根異枝」と譬えられた中医学と漢方医学の両者は、言わば中国系・インド系・アラビア系といった「世界三大伝統医学」の中、共に中国伝統医学系に属しているものです。日本は1500年前に中国から中医学を導入し始め、それを絶えず消化吸收し日本化させて来たのです。江戸時代以来、後世派・古方派・折衷派と考証学派などが相次いで日本に現れ、昭和後期には現代流漢方も一流派となっている。今日までの日本漢方医学においては、中国の中医学と様々な違った展開がみられています。

一方、近代以来の日中両国の伝統医学分野では、日本からの中国に対する影響も無視できなくなり、とりわけ古典文献や傷寒論、腹診、生薬の薬理、ならびに鍼灸・経絡などに対する日本側の研究が、中国の中医学業界に強い関心を持たせてきたのです。

演者はこれまで、主に漢方医学の「証」における学術史の考察を通じて、漢方医学と中医学との比較研究を追究してきました。

ここに、まず日本医家の「証」に関する検討を取り上げ、今日の臨床と関わっている「隨証治療」「方証相対」、ならびに「察証弁治」などの方法論の異同と関連性について、一緒に考えてみます。

また、「方証相対」「隨証治療」以外の、「口訣漢方」の源流とその口訣の応用法則を考察してみます。この他、季節・体质・標本の違いに応じたり、病因・病機などの弁別を踏まえたりした、豊富な診療方法を提示した漢方医学の症例を管窺してみます。

元禄期の生活習慣病の症例解析を通して、日本の痰飲に関する研究の現代社会および中国の中医学に対する参考価値を吟味します。

保健医療と統合医療を重視している今日、葛根湯や小柴胡湯などのような漢方薬の応用基準と関わる諸問題、漢方の伝統と流派の伝承および発揚、EBM漢方の展開、漢方医学の教育と普及の更なる発展など、様々な困惑・課題・挑戦が漢方医学界に直面させている。実は、中国の中医学界でも似ているような事情や危機・機転などがあります。

漢方医学と中医学は、お互いにとて異質な医学体系ではなく、両者の学術は緊密に絡み合っており、お互いに浸透し合い、影響し合い、相補し合う局面も呈していると思われます。このため、日中両国の医学交流と学術争鳴の推進は、漢方医学と中医学の各自健全な発展にとっても、両国の国民の利益にとっても、お互いにプラスになると演者は確信しています。